

## 336. 木製威信具<sup>いしんく</sup>が出土

－草津市柳遺跡<sup>やなぎ</sup>の調査成果から－

### 1. 柳遺跡の概要

柳遺跡は、琵琶湖から約5km東側の草津市青地町に所在する弥生時代から江戸時代にかけての遺跡で、草津川放水路（新草津川）の建設に伴って、平成8～13年度に発掘調査が行われました。ここでは、平成12・13年度の発掘調査で出土した木器を紹介します。

### 2. 弥生時代の集落跡

発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての住居跡や河川跡がみつかりました。河川は遺跡の中を縦横に流れており、水田に引水するための施設として堰や分水溝が設けられているものがあります。

埋没した河川からは、収納箱で1,000箱を超える多量の土器や木器などが出土しました。出土品の多くは弥生時代後期後半～古墳時代初頭（2世紀～3世紀前半）のものと考えられます。



写真1 河川跡（手前が堰）

### 3. さまざまな木器

土中に埋没した木器は、多くの場合、腐食して消滅してしまいます。ところが、今回の調査地付近は地下水位が高く、空気から遮断された環境が保たれ続けたことにより、良好な状態で遺存していました。

出土した木器には、斧の柄<sup>おの</sup>、鍬や鋤<sup>くわ</sup>・臼<sup>うす</sup>・堅杵<sup>たてぎね</sup>などの農具、容器類<sup>たて</sup>、盾、琴、祭祀用具、また、柱や梯子<sup>はしこ</sup>といった建築部材など、さまざまな用途や種類のものがあり、これらは往時の人々の暮らしぶりを鮮やかに蘇らせてくれます。

また、製作途中で埋もれてしまった未製品が多いことも特徴的です。河川内に埋没していた流木や種子・花粉化石を調べた結果、柳遺跡の周辺にはカシやシイからなる照葉樹林が広がり、スギ・ヒノキなどの針葉樹やクリも多く植生していたことがわかりました。当時の人々は、集落の周辺に広がるこれらの豊富な森林資源を大いに活用して、活発に木器を製作していたのでしょう。

注目される木器のひとつとして、大型の鉢（写真7）



写真2 さまざまな木器



写真3 鋤と未製品



写真4 鋤と未製品



写真5 臼と堅杵

(右の臼は、口径が87.0cmで、弥生時代の臼としては全国最大のものです。)



写真6 盾

(水銀朱や黒漆で彩色され、多数の小孔列をあけて細紐で刺し縫いされています。使用材は軽軟なモミです。はたして、実戦で使用されたのでしょうか?)

が挙げられます。これは、内面にべったりと赤色顔料の水銀朱（硫化水銀）が付着し、器面が摩擦を受けて黒く光沢がかったことから水銀朱の精製に用いられたものとみられます。水銀朱の製造という特殊な作業に関わる集落の特殊性が窺えます。



写真7 水銀朱精製用鉢

#### 4. 権威の象徴

今回の調査では、農耕具や雑具などの日常生活にかかわる道具のほかに、首長クラスの貴人が権威の象徴として用いた威信具が出土しています。

写真8は、食物を盛り付けるのに用いる高杯<sup>たかつき</sup>ですが、杯部の裏に花卉状の精巧な透かし文様や楔形文様が彫刻されています。類似するものが、古墳時代初頭のヤマト王権の中核と考えられている奈良県纏向遺跡<sup>まきむく</sup>から出土しています。これは王権の中枢を担った人物が、その威信を誇示する儀礼や祭祀を執り行う際に手にした器物であるとみられます。柳遺跡出土品は、その作りが精巧で、纏向遺跡出土高杯と同様にケヤキを用いていることから、ヤマト王権からの下賜品<sup>か、しひん</sup>である可能性があります。

写真9は、団扇形木製品と呼ばれるものです。獣毛や鳥の羽などによる扇を挟み込んだものとみられ、一木から削り出された二枚板構造の要<sup>かなめ</sup>と柄からなります。柳遺跡出土品は、一方の要の破片で、もう片方の要と柄は失われています。挟んだ扇が脱落しないように綴じるための小孔が上端に2孔確認できます。

団扇形木製品は、塵尾<sup>しゅび</sup>という儀器にあたる<sup>き</sup>と考えられています。塵尾は貴人の顔に翳<sup>かざ</sup>す道具で、『広辞苑』によれば、「塵」は大鹿で、トナカイの類。もと



図1 中国嘉峪関壁画の塵尾（魏晋）



写真8 透かし文高材



写真9 団扇形木製品（塵尾）

塵の尾の毛で作った。トナカイは群れをなし、その主たるものに絶対服従するから、一教団の徒が教主に従う意を寓したものだ」とあります。塵尾は、中国では漢代以前に存在していたといわれ、中国・朝鮮半島の壁画、中国鏡や京都府椿井大塚山古墳出土鏡などにその表現がみられます。また、正倉院宝物や法隆寺献納宝物として奈良時代の実物が伝世しています。

## 5. 柳遺跡の性格について

透かし文高杯や団扇形木製品といった威信具は、どの集落からでも出土するというものではありません。

透かし文高杯は、先述した纏向遺跡のほかに、滋賀県入江内湖遺跡、石川県千代・能美遺跡から類似品が出土しています。

柳遺跡から出土した団扇形木製品と同類のものは、滋賀県下長遺跡・入江内湖遺跡、奈良県勝山古墳・纏向遺跡、岐阜県荒尾南遺跡、石川県千代遺跡から出土しています。纏向遺跡を中心として成立した古墳時代初めの塵尾を用いた祭儀が、近江・美濃・加賀の拠点集落に伝播したと考えられており、これを出土する遺跡の性格として、琵琶湖の水運による日本海側あるいは東国へのルートの拠点、東国への出入り口、北陸ルートの拠点に位置する拠点集落と評価されています（鈴木2003）。

滋賀県内での出土遺跡をみると、下長遺跡は首長居館とみられる区画がみつき、多数の威信具が出土し

ているなど、古墳時代初頭から前期にかけての野洲川下流域における中核集落であり、準構造船の出土から琵琶湖や河川水運を利用して他地域と活発に交流していたとみられます。入江内湖遺跡についても内湖に立地し、古墳時代前期の準構造船が出土していることなどから、往時の水上交通の拠点であったことが推測できます。加えて入江内湖遺跡が所在する米原市は、近世には中山道と北国街道が分岐する陸上交通の要地でもあります。柳遺跡は、東海道と中山道（古代・中世は東山道）が分岐する交通の要衝に立地しています。

柳遺跡や下長遺跡・入江内湖遺跡が、古墳時代以前においても畿内地域と北陸や東国を結ぶ水陸ルートの結節点としての位置を占めていたことは想像に難しくなく、透かし文高杯や団扇形木製品の出土は、これらの集落の首長がヤマト王権と密接に連係していたことの証とみてよいでしょう。

以上のように、柳遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭期にかけての大規模な集落であるだけでなく、特殊な威信具を手にした特定有力者が居住し、水銀朱の製造という特殊な手工業が営まれるなど、草津川流域地域における中核的な集落であったことが分かってきました。またこのことは、弥生時代から古墳時代への移行期において、初期ヤマト王権が倭国の統合を進めるうえで重要な役割をはたした集落であったと考えられるのです。

柳遺跡の現在までの発掘調査では、傑出した規模の住居や、守山市伊勢遺跡・下長遺跡、栗東市下鉤遺跡でみつまっているような大型掘立柱建物などは確認されていません。集落中枢部の様相については、今後の調査の進展によって、明らかになってくることでしょう。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 平井美典）

この遺跡についての詳細は下記の発掘調査報告書をご覧ください。滋賀県内の図書館などで閲覧することができます。

◆『草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書XI 柳遺跡IV』、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、2008年

### 【参考文献】

- ・鈴木裕明「古墳時代前期の団扇形木製品の展開とその背景」『初期古墳と大和の考古学』、学生社、2003年
- ・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『図録第53冊 権威の象徴－古墳時代の威信具－』、2000年



図2 柳遺跡と同類の透かし文高杯と団扇形木製品の分布

写真提供：滋賀県教育委員会